「日本語は日本人のもの」という捉え方のもつ問題

真田 信治

本書は、さまざまな文献資料を渉猟し、そのそれぞれに対して一貫した視点からの批判的な論評を加える、といった著者の連作の最新刊である。

本書の前半では、日本植民地時代の台湾を例にして、台湾人が話す日本語を、日本人の教員・研究者たちがどのように捉えていたのかを概観している。台湾での「かれらの日本語」を矯正すべき「誤謬」と見なす者がいた一方で、台湾在住の日本人のことばからの影響も受けた、その意味では彼我の峻別のできない「台湾方言」と捉える者や、さらには別の言語体系が発生するのではないかと予測する者がいたことを明らかにしている。

本書の後半では、戦後の「かれらの日本語」の展開を追っている。台湾では日本語はそれまでの国語としての位置を外れたにもかかわらず、一九六〇年代以降に日本人の訪問が増えるにつれて改めて見直され、植民地支配の「成功」といった文脈で語られるようになってくる。そして、こうした潮流を踏まえ整理した上で、台湾東部のアタヤル人の一部で話されている言語を「クレオール」という話し手の「母語」にまでなっていると捉える研究を取り上げて論評している。

評者は誰よりも著者の感性に共感を覚える、著者のシンパサイザーである。〝ことばはだれのものか――ことばはわたしのものでしかない〟、〝「～語」や「～方言」と名付けられた瞬間に、それは個々の人間から乖離していく〟、〝「言語」と「方言」の違いは言語学の問題というより、すぐれて政治にかかわる問題である〟等々の言及は、まさに評者自身の主張するところでもある。

外国人のしゃべる日本語に対して、「日本語が上手ですね」などと応じる心理。日本人のなかにある「日本語はわれわれ日本人のもの」といった観念の抜けきらない、いわば上からの目線。それが本書で中核とするところの、戦前の、そして戦後も含めての「かれらの日本語」という視線自体への批判である。

留学生のことばのなかになまりがあって困る（たとえば、母国で九州なまりのある先生に教えられていたらしい、困ったことだ）、などといった話を日本語教師がしているのを往々にして耳にする。しかし考えてみれば、われわれは九州なまりのある日本人に対して、はたしてそのよ

安田敏朗著
かれらの日本語
――台湾「残留」日本語論

四六判　291頁
人文書院［2940円］

うな言及をするであろうか。九州なまりがあるからといって、その人のことばの先生（生活のなかでは親）のことを批判したりするであろうか。このような事例も本書で批判する日本人の精神構造と相応していよう。

著者はかつて次のように述べた。

日本は台湾を一八九五年に領有しますが、そのときに当地で国語教育も始まりました。そうすると、「教えるべき言葉」、「教科書につかわれるべき標準体」というのが必要になる。その基準が整備され、確立し、その基本を持って日本語教師が満州や東南アジアへ派遣されて、現地で日本語教育が行われました。戦争が終わり、植民地下の国語教育としての日本語教育は終結するわけですが、戦時中にあった日本語教育は悪で、現在の日本語教育は善であるとは、簡単には言い切れないように思います。方言を排除し、植民地の言葉を抑圧してきた過程で成立したのが日本語教育なわけで、それと今の国際交流の中で行われている日本語教育が全く違うとは、言い切れないのではないでしょうか。（略）そもそも「言葉を教える」ということが政治的に中立では有り得ないということを、日本語教師は認識すべきだと思います。それがないと、国際交流という大きい流れに乗っかってしまう。日本語教育に国際交流というパラダイムがあったとしても、「国際交流」の代わりに「大東亜共栄圏」と言えば、戦前の構造と変わらなくなってしまう。

（「対談　日本語教育の再構築」『月刊日本語』一九九九・五）

この言辞に共感する立場から、毎年、評者のゼミで学生たちに、この文章内容についてのコメントを書かせている。そこでは、大部分の学生たちが、特に海外で日本語を教えた経験のある学生が、現在の日本語教育の現場や教師の心情を無視した勝手な思い込みであるとして、著者の見解に強く反発していることを明らかにしておきたい。

評者はまた、中国東北部でのフィールドワークで出会った老齢の女性の語りが忘れられない。彼女は、朝鮮戦争時、人民解放軍の医療班として半島へ進軍した兵士の一人なのだが、かつて医学を教授してくれたのも生活の改善に尽くしてくれたのもすべて日本人だった、日本人は私の恩人だ、と言っていた。彼女の夫も日本語が話せる人で、小学校の校長であったが、文化大革命の折、教室でちょっと日本語をまじえて話しただけで紅衛兵に連行され、街中を引き回されて片足を失ったとのことである。中国人が、日本人の貢献について教育されていないことがとても残念だ、とも言っていた。

植民地支配を肯定するわけでは決してない。しかし、当時の現地での情況を身体で感じることのできない立場で、いわばエリートたちが建前として書いたものに基づいて、ステレオタイプ的に批評すべきではなく、現地での個々の体験者の心に沿った論述を心掛けるべきだと評者は考えている（もちろん、語り手のみに頼った論じ方の危険性も視野に入れた上で

の話ではあるが）。その点に関して、現地調査をまったく行わずに、文献資料のみを扱って、アプリオリに批評する著者の手法に対しては、やや違和感が残ることも事実である。もっとも、著者の文献資料の渉猟には心から敬服するところであり、批評の文章そのものはナイーブ、かつ文学的で魅力的ではあるのだが。

ところで、評者は、著者のこれまでの連作において批評のターゲットになった人が、「見当違いだ」、「わかってもらっていない」などと表明する現場に幾度か立ち会ってきた。そのつど、そうであるなら反論を加えればいいのに、と思ったことである。しかし、このたび評者たちの研究が俎上にのぼることになってはじめてその人々の心持ちの一端が理解できたような気がしているのである。本書での批評のターゲットの一つになったのは、評者たちが発見し、その後、現地の話者たちの要請を受ける形で記録、記述している「宜蘭クレオール」についてである（「発見」という表現に著者は異を唱えているが、著者のことばを借りれば、それは「それ以上でも以下でもない」のである）。

宜蘭クレオールとは、台湾東部、宜蘭県のアタヤル人の一部の村で使われている言語のことである。アタヤル語を基層に、日本語を上層として再編成された新しい言語であるが、現在は各世代の唯一の母語となっている。世代を通して継承されているという点で、またアタヤル語の母語話者も日本語の母語話者も、聞いただけではまったく理解できないような姿に再編成されているという点で、われわれはこれを言語学的見地から「クレオール」と認定したのである。認定当初、日本の植民地統治を背景としての日本語がかかわっている、という意味あいにおいて、「日本語クレオール」と称したのであるが、これを台湾での高年層の人々が共通語として使用している日本語変種と混同する向きがあり、それを危惧して、改めて「宜蘭クレオール」と命名したのであった。したがって、宜蘭クレオールは日本語ではなく、あくまで「かれらのことば」なのである。そして、それは「かれらの日本語」という範疇において論じられる対象ではないのである。

宜蘭クレオールに関して、著者は次のようにも述べる。

わたしは調査をしていないので、それが「クレオール」であるか否かを判断する立場にない。どうやら周囲とは異なる言語変種が話されていることは確かなようではあるものの、実はまだよくわからない。詳細な、そして貴重なデータは近々明らかになるだろう。

そうだとすれば、クレオール論の全体の流れを捉えずに、現段階において自分に関心のある部分の表現だけを切り抜いて、自分に都合よく論評することは問題なのではなかろうか。「歴史を経た語り口の構成をふまえずに、それぞれの立場で都合のよいように利用することには少なからぬ問題があるといってよい」（「はじめに」）という著者のことばはブーメランのように著者自身に返っていくように思われる。（さなだ・しんじ　奈良大学）